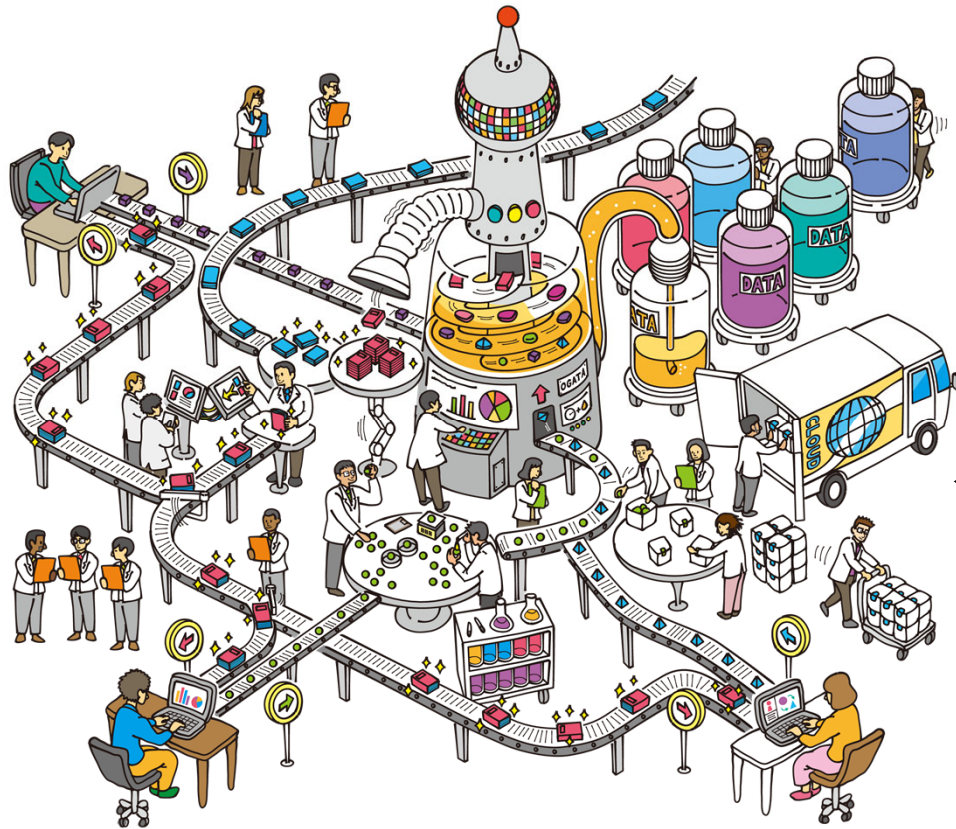




京都大学
KYOTO UNIVERSITY



コロナ禍での 教育の変容と未来

京都大学 学術情報メディアセンター
緒方広明

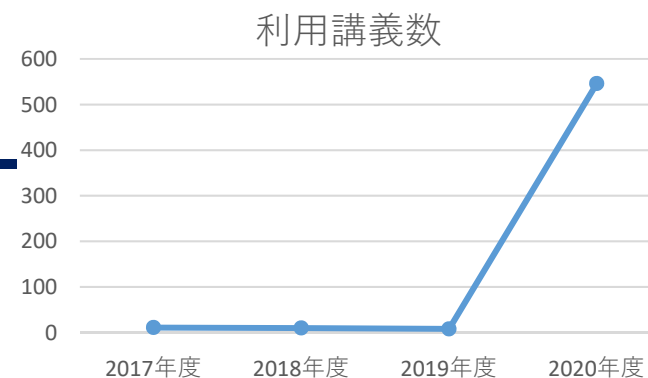


Learning and Educational Technologies Research Unit

これは発表者の個人的な見解です。



の利用の推移



	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
利用講義数	11	10	8	546
利用学生数	659	808	761	9,762
教材登録数	22	107	163	3,696
ログ数	505,771	901,403	1,276,297	10,229,499
ログデータの容量	0.6GB	1.4GB	2.9GB	25.6GB
教材データの容量	0.4GB	1.5GB	1.2GB	150GB*

*音声も含む



コロナ禍前後の教育の変容の一考察



これまでの教育	コロナ禍での教育
教室での対面授業	<ul style="list-style-type: none">・ 同期・非同期型のオンライン授業・ ハイブリッド型の授業
対面の教室で行える人数	<ul style="list-style-type: none">・ 対面での人数は少数・ オンライン参加は制限なし (学外や海外からも参加)
成績評価は、対面による最終試験がほとんど	<ul style="list-style-type: none">・ オンラインによる形成的評価・ レポート評価・ オンラインでの監視による試験・ オープンブックによるオンライン試験
先生による成績評価	<ul style="list-style-type: none">・ 学生によるピア評価 (+先生)・ システムによる自動評価
対面での実験・実習	<ul style="list-style-type: none">・ VR/AR等を用いた実験・実習・ 個別に実験装置を送って指導
対面でのグループ学習	<ul style="list-style-type: none">・ オンラインでのグループ学習・ 対面とオンラインが混在したグループ学習
教科書や教員が作成したコンテンツを受講生のみが利用	<ul style="list-style-type: none">・ 教員が作成したコンテンツを共有・ 既存のオンラインコンテンツを利用
図書館	<ul style="list-style-type: none">・ 学生に紙の本を郵送・ E-Bookを用いたデジタル図書館へ

コロナ禍での教育の変容(2)

- 教育のデジタル化の遅れが顕在化した。
- ZoomやLMS等のシステムがたくさん出てきて改善された。
- LMSの利用が増え、オンライン教材がたくさん作成された。
- 教員や学生のICTスキルがアップした。
- リアルタイムで事例を情報共有ことが大事（即時性）
NIIのシンポジウム
特に、海外の取り組み事例への関心が高かった。
- リモートでの学生の学習状況を把握したり、教育改善のために教育データの利活用（ラーニングアナリティクス）の重要性が高まった。

それでは、コロナ禍以降の教育は？

- 教育データを収集し、ラーニングアナリティクスを適切に用いて、教育・学習の支援や改善を行うというのがあたり前になる。
- これによって「勘と経験に基づく教育」から「データやエビデンスに基づく教育」へと転換が促進される。
- これまでの教員の経験や教える授業内容、学生の状況等に合わせ、どのような教材やデジタル技術、過去のエビデンスを用いてどのような授業を提供するのが、ベストな組み合わせかを追求していく時代
- **ベストミックス教育(Best Mixed Education)**